

65. 物語論から読むエミール・バンヴェニストー再解釈の試み

慶應義塾大学 理工学部（外国語・総合教育教室） 教授 小野 文

概要

本研究は、エミール・バンヴェニスト（1902-1976）の言語理論を物語論（ナラトロジー）の観点から再考することを目的とした。バンヴェニストの「レシ（歴史物語）／ディスクール（言説）」の区分は、「歴史叙述に語り手は存在するか」をめぐる論争を生んだが、論争の当事者たちはバンヴェニストの書き物の要所しか読んでいない。本研究はその出発点に立ち返り、未公刊草稿を含むテキストを丁寧に読み直すことを目指した。

研究代表者の小野（バンヴェニスト研究）と協同研究者の久保昭博（物語論・フィクション論）を中心に、2年間で全7回の研究会を開催し、多様な分野の研究者による15回の講演・研究発表を実施した。また、パリ国立図書館(BnF)・コレージュ・ド・フランス資料庫・プラハにおいて草稿・書簡等の資料調査を行った。

その結果、小野はバンヴェニストの発話行為論に関するフランス語論文、声とエクリチュールの接近をテーマとした論文を執筆し、さらにバンヴェニストの言語思想に関する著作を執筆した。久保はフィクション論・物語論に関する論文2本を発表し、国際ワークショップを主催した。研究会での議論を通じて、物語や演劇における複数の「声」の問題が新たな研究課題として浮かび上がった。この問題圏は言語学・文学理論・演劇論の交差点に位置する豊かな領域であり、2026年4月からは新たな研究会を立ち上げてさらに探究していく予定である。

三菱財団からの助成金は、多様な研究者の招聘による継続的な研究会の運営、およびパリ・プラハ・ベルンでの資料調査の実現において不可欠であった。心より感謝申し上げます。

背景および目的

20世紀フランスが生んだ最大の言語学者、エミール・バンヴェニスト(1902-1976)の言語理論のなかでも、「人称」「時制」「中動態」に関する問題圏は、物語論（ナラトロジー）に大きな影響を与えたものとして知られている。バンヴェニストは語りの面のなかに楔を打ち立て、「レシ（歴史物語）」と「ディスクール（言説）」という二つの領域を分けた。この区分から発して、二つの対立する見方が立ち上がることになった。一つはアメリカの文学研究者アン・バンフィールドに代表される立場で、「歴史叙述には語り手が存在しない」ことを主張する。もう一つはフランスの文学理論家ジェラルド・ジュネットらの立場で、たとえ「出来事自身が物語るかのように見える」のだとしても語り手は存在するのだと主張する。この二つのグループの対立にはデリダを始めとする現代思想家たちも絡んで複雑な様相を呈するが、バンヴェニスト研究の側から見れば、彼らはその出発点とする諸論考の要所しか読んでいないと言える。両者が取り上げない書き物のなかで、バンヴェニストが「物語」や「ディスクール」といった語りの特性、人称／非人称の問題、語りの本質的な虚構性を扱っているにも拘わらず、である。

本研究の第一の目的は、こうした論争の出発点であるバンヴェニストの書き物に立ち返り、物語論の立場からそれを丁寧に読み直していくことにあった。とりわけパリ国立図書館(BnF)に保存されている未公刊の草稿資料の掘り起こしは、この「物語論から見るバンヴェニスト再考」に大きく貢献するものと期待された。第二に、物語論・フィクション論・文学理論を専門とする研究者たちに講演を行っていただき、その知見を共同研究に取り入れることも目指した。研究代表者の小野（バンヴェニスト研究）と協同研究者の久保昭博（物語論・フィク

ション論)がそれぞれの専門的知見を持ち寄りつつ、こうした外部の研究者との対話を通じて視野を広げ、2年間の共同研究を通じて国際的な議論の場で発表しうる研究成果を目指した。

方法

a) 研究集会 2年間の助成期間を通じて全7回の研究会を開催し、合わせて15回の講演・研究発表が行われた。各回の内容は以下の通りである。

第1回(2023年9月23日、明治大学駿河台キャンパス)・小野 文「バンヴェニストの非人称について」・石井 咲「ロラン・バルトのテキストにおける人称代名詞の使用について——その変遷と「新たな生」」

第2回(2023年11月18日、明治大学駿河台キャンパス)・久保昭博「語り手(不在)論争におけるバンヴェニストの位置」・郷原佳以「物語理論における二つの系譜と存在しない語り、あるいは、エクリチュール」

第3回(2024年3月24日、関西学院大学大阪梅田キャンパス、ハイブリッド開催)・松浦菜美子「バンヴェニスト×物語論×抒情詩——1996年の「抒情詩の主体」論」・平中悠一「比較ナラティヴ理論——バンフィールド理論とその注目点、独自の理論的展開」

第4回(2024年7月13日、明治大学駿河台キャンパス)・根本美作子「わたしは日本語で存在しない」・石井 咲「ロラン・バルトのテキストにおける小説的虚構の導入方法と単純過去の使用」

第5回(2024年11月9日、明治大学駿河台キャンパス)・小林 薫「ギリシャ悲劇におけるコロスのことばの多層性」・横山義志「「やりすぎ」を告発するか、楽しむか?——古代ローマ叙述形式論と18世紀フランス悲劇における「気取り」容認論について」

第6回(2025年3月30日、関西学院大学大阪梅田キャンパス、ハイブリッド開催)・中村ともえ「吉本隆明にとって歌とはなにか——『言語にとって美とはなにか』第Ⅲ章考」・山田広昭「恣意性、翻訳、文法:サピア・ウォーフの仮説と物語」

第7回(2025年10月19日、明治大学駿河台キャンパス、ハイブリッド開催)・小野 文「非人称、虚構の語り——バンヴェニストの言語思想から」・郷原佳以「四人称について」・久保昭博「言語論からみる証言論——主体性、伝達」

b) 資料調査 研究代表者の小野は、パリ国立図書館(BnF)およびコレージュ・ド・フランス資料庫において、バンヴェニストの未公開草稿の複写・調査を行った。またプラハではプラハ学派の研究会記録およびR.ヤコブソンの書簡等を閲覧、スイス・ベルンにおいてG.ルダールによるバンヴェニストの講義の聴講ノートを閲覧した。

結果とまとめ

2年間の共同研究を通じて、以下の成果が得られた。

研究代表者の小野は、バンヴェニスト言語思想における「話す」という動詞の成り立ちを、インド=ヨーロッパ語根*bhā-の分析を通じて考察したフランス語論文を執筆した(2026年刊行予定)。また、バンヴェニストの言語思想における声とエクリチュールの接近をテーマとした論文「声の刻印」を発表した。さらに、サバティカル期間中にパリで集中的な草稿調査と執筆を行い、バンヴェニストの言語思想を包括的に論じた著作『話すことの深淵へ:エミール・バンヴェニストの言語思想(仮題)』を執筆した。

協同研究者の久保は、ジャン=マリー・シェフェールのフィクション論と美学を検討した論文と、メディア横断的な観点から物語論を再考する論文の2本を発表した。また、フランソワーズ・ラヴォカ(ソルボンヌ・ヌーヴェル大学)と辻川慶子(白百合大学)を招いてワークショップ「メディアを横断するフィクション」を主催した(2024年12月、東京大学)。

研究会においては、物語論・文学理論・言語学・古典学・比較文学など多様な分野の研究者による講演を得たことで、当初の想定を超えた学際的な議論が展開された。とりわけ、バンヴェニストの「レシ/ディスクール」の区分をめぐる語り手の問題が、バルトの人称代名詞の使用、ギリシャ悲劇のコロス、日本語における人称の不在、抒情詩の主体など、多方面から照射されたことは大きな収穫であった。

今後の展望

2年間の共同研究を通じて、バンヴェニストと物語論との関係は当初想定していた以上に複雑かつ多層的であることが明らかになった。とりわけ研究会での議論を経るなかで、物語や演劇のなかに現れる複数の「声」の問題が、本研究の中心的な問いとして浮かび上がってきた。バンヴェニストの「レシ／ディスクール」の区分は語りの主体をめぐる問題を提起するものであったが、そこからさらに進んで、テキストのなかで交錯し重なり合う諸々の「声」をどのように捉えるかという問いは、言語学・文学理論・演劇論の交差点に位置する豊かな研究領域を開くものである。

2026年4月からは新たな研究会を立ち上げ、このバンヴェニストと物語論の問題圏とそこに響き合う「声」の問題をさらに深く探究していく予定である。

(完)

研究論文（代表研究者と協同研究者）

- 1) 小野 文「誰が話しているのか---エミール・バンヴェニストの言語思想における異質な「話し手」の相貌」『言語文化研究所紀要』（慶應義塾大学）、第54号、2023年、p. 1-25。
- 2) 小野 文「声の刻印--E.バンヴェニストの言語思想における声とエクリチュールの接近」、岩波敦子（編）『ことばが紡ぎ出されるとき』（慶應義塾大学言語文化研究所）、知音書館、2026年、p. 30-52。
- 3) ONO Aya, "Benveniste et l'énonciation" in Marion Carel et Lauro Gomes (éds), *Sémantique, pragmatique et énonciation*, 2026 (à paraître). (2026年出版予定)
- 4) 久保昭博「経験としてのフィクションージャン＝マリー・シェフェールのフィクション論と美学」、塚本昌則、鈴木雅雄編、『〈現実〉論序説ーフィクションとは何か？ イメージとは何か？』、水声社、2024年、p. 257-278。
- 5) 久保昭博「メディアを横断するフィクションー物語論再考」、辻川慶子編『大衆文化とメディア』（アウリオン叢書23）、弘学社、2024年、p. 151-165。
- 6) KUBO Akihiro, « Japon : culture populaire et environnement transmédiatique », Françoise Lavocat (éd.), *La Mémoire des personnages*, Épistémé, 2026, pp. 139-151.

研究発表(学会・ワークショップ)

- 1) ONO Aya, "Groupes de linguistes japonais dans les années 20 et 30 --- À la recherche du Cercle linguistique de Tôkyô", in the Workshop "Un cercle linguistique de Tokyo? --- autour de Hideo Kobayashi et Henri Frei", le 5 déc.2025, Laboitoire Histoire des Théories Linguistiques (HTL), Paris, Université Paris Cité.
- 2) KUBO Akihiro, "The Art of Testimony and the Rejection of Fiction: Rethinking Claude Lanzmann's Aesthetic Stance, Workshop "Who's Afraid of Fiction?", International Comparative Literature Association, August 1st 2025, Seoul, KINTEX (Dongguk University)